

MARANTZ-7・PEERLESSとの惜別とハイレゾ写真

鈴木 菊 雄

「JIMLANとの惜別と山岳写真」というテーマで掲載して以来、早いもので12年が経過した。その後は別居も出来ずにだらだらと時間が経ったが、今年になってやっとMARANTZ-7・PEERLESSの嫁ぎ先が決まり送り出すことが出来た。JIMLANとはJames B. Lansing略してJBLというオーディオスピーカー、MARANTZ-7はプリアンプ、PEERLESS ALTECは管球式のパワーアンプで何れも栄光時代の米国生まれである。

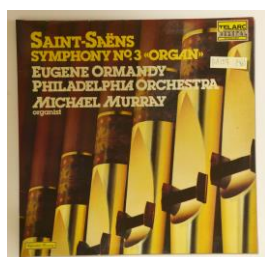
山岳写真撮影に時間がとられて、愛娘のオーディオ装置をじっくりと奏でさせる時間が激減しており、早い内に嫁ぎ先を決めないことには、いずれ粗大ゴミとして処分される運命にある。



特にPEERLESSは重量が38kg・ペアで76kgの大娘、持病の腰痛にも堪えるのだ。

やっと11月の吉日に送り出した先は岐阜県の閑静な住宅地に住む60歳の男性で、英国の名門であるTANNOYのAUTOGRAPHとKEF-R900というシステム（設置面積は6畳間位は占有しそう）で、これ以上は考えられない良縁である。市街部では羨ましいお屋敷と思える。臨時収入で最新の645デジタルとレンズ一式を導入するか・・・でもカミサンと海外旅行にでも投資して、しばらくは内外の写真を撮らせてもらおうかと思案中である。

このPEERLESS AMPが生まれたのは50年前の1981年頃であり、音の世界ではデジタル化が進みCDオーディオが開発されていた時期である。



こんな時期に、私は会社命令で日本・いや世界初のCDオーディオの商品開発を担当することになり、1982年の11月に新発売にこぎつける事ができた。当時は日本のオーディオ製品は品質と量共に世界の先端をいっており、成熟期を迎えていた時代だ。ハイエンドのオーディオ愛好家・ユーザーには玩具的なデジタルCDには抵抗が強く、私も同じ思いが強かった。

会社からすれば、あの超アナログ人間の煩い奴を黙らせて、不景気な市場を早く活性化したいということだったのであろう。私にとっては初めてのデジタルとの関わりであり、運命を変える転換期でもあった。

CDはオランダのフィリップス社の発明で直径も今よりかなり小さい8cm、カセットテープの後継としての位置づけであった。日本のメーカーが対象にしていたハイエンドオーディオの記録媒体とは大きく異なっていた。それでも製品化するには日本の技術、特にSONYのデジタル関連技術は絶対に必要なものであり、双方の歩み寄りで現在のCDが生まれた。大きさは日本のベートベンの第9交響曲（当時はLP2枚）を1枚にするために12cm直径に決め



られた。当時は写真や動画のCD化などは全く考えられなかったが、もしもつと先をみて採用されていれば、現在のデジタル写真も大きく変わっていただろう。現在はCDから、DVD・ブルーレイディスクと進化してきたが、同じように見えても両者の記録は大きく異なる。CD

は「リニアPCM」という方式でデジタル化しているがDVDなど多くは、デジタル化の際に情報を間引いてるの。写真でいうと同じような絵柄や灰色諧調の部分の情報を間引いて、周囲の部分から補充して復元するということで記録性を高めている。

この現実が銀塩アナログ写真に比べて、黒色や諧調に不満が残る要因にもなっている。最近ではカメラ内の画像エンジンと呼ばれるコンピュータの精度向上で、アナログ写真との差が少なくなっているが、情報を細切れにして、間引いた情報を補完するということは変わっていない。

一方、音楽を記録するオーディオではCDやDVDなどの記録媒体が廃れて、iPhoneなどのNETオーディオが盛んになっている。CDオーディオに不満なプロやハイエンド・オーディオ愛好家にはCDから進化したスーパーCDなる規格が登場したが、今尚普及には至っていない。

そんな、ハイエンドの世界に最近では、**ハイレゾリューションオーディオ (High-Resolution Audio)** 略して「**ハイレゾ**」なる方式に注目が集まっている。人間の聴感の限界といわれる20000Hz以上の96000Hzまでを間引かずに記録することで、音の余韻や音楽ホールの臨場感の再現に近づけようという方式である。デジタル写真の世界では未だこのような発想は出ていない。フルサイズ・一眼レフなどが好調で未だ未だ刈取りに精を出したいニコンやキヤノンが頑張っており、その市場が成熟してこない新しいシステムは難しいかもしれない。

しかし、いずれはデジタル写真の世界にもこの「**ハイレゾ写真**」が登場してくるであろう。その時こそ銀塩だ・デジタル写真だという言葉も死語になる時である。

次世代のカメラでは、「**ライトフィールドカメラ**」なる技術が提案されている。画像素子と光学レンズの間に10万個以上のマイクロレンズを入れることで、「**ピンボケ無し・ブレ無し・構図やアングルは後で変更可能・邪魔物は消せる**」というカメラマンにとっては理想的なカメラだ。願わくば、私が現役カメラマンである内にハイレゾカメラを持って北アルプスやヒマラヤの山岳風景を撮りたいものである。

2015/01/01